

# 中国語の量詞“条”と日本語の助数詞「本」の 多義的ネットワーク

橋本永貢子

要旨 本稿は、中国語の量詞“条”と日本語の助数詞「本」について、歴史的文献に基づき、用法の拡張とその動因を考察した。また、今日的解釈との異同および両者間の拡張過程の異同について、次の3点を指摘した。

- ① “条”にも「本」にも、情報に関わる事物を数える用法はあるが、拡張のルートは異なり、またいずれも導管メタファーによるものではない。
- ② 拡張的用法は、プロトタイプ属性との意味的関連が希薄な場合には淘汰されるか、あるいは新たに関連付けられることで持続する。
- ③ “条”は、「本」に比べ、より創造的に用法を拡張している。

キーワード 量詞“条” 助数詞「本」 拡張 スキーマ 導管メタファー

提要 本文根据历史文献对汉语量词“条”和日语助数词「本」的用法扩展及其动因进行了考察，提出了些许与当前通行理解不同的观点。同时，我们还比较了两者在范畴扩展上的异同，分析出以下三点：

- ① “条”和「本」都用来数“信息”类事物，但是两者的扩展途径不同，而且都不是通过管道隐喻促动而来的。
- ② 如果扩展用法与典型用法意义上相差较大，则或者被淘汰或者重新与典型用法关联起来。
- ③ “条”与「本」相比，“条”的扩展更加灵活。

关键词 量词“条” 助数词「本」 扩展 图式 管道隐喻

## はじめに

本稿は、中国語の量詞“条”と日本語の助数詞「本」について、歴史的文献に基づき、用法の拡張とその動因を考察し、今日的解釈との異同および両者間の拡張過程の異同を明らかにする。

中国語と日本語には、量詞と助数詞という用語こそ異なるものの、ともに classifier、すなわち類別詞に当たる文法カテゴリーが存在する。しかし、どのような量詞・助数詞をどのような事物に用いるかは、両者が一致する場合もあれば、しない場合もあり、一中国語学習者としても大変興味深い。なぜなら、それぞれの言語が世界をどのように切り分けているのか、あるいは事物のどのような側面に着目するのかを垣間見ることができるからである。ただ中には、日本語での用法と異なるという理由のみによらず、辞書や用法辞典での記述を見ても、量詞と名詞の結びつきが理解しにくいケースがある。例えば、細長い物を数える際に用いられる“条”で、犬や布団、心を数えるような場合である。こうした用法に関して、Tai & Wang 1990、木村1996、安井1998、宗守云2011、周・邵2014など、すでいくつかの論考が、様々な解釈を試みている。それぞれの解釈は、学習者である筆者にとって納得できるものもあれば、そうでないものもある。“一条命”は「紆余曲折をたどりながら長らえる人の“命”」<sup>1)</sup>を言い、“一条心”は「相手につながる」<sup>2)</sup>心を言うとするれば、どちらもメタファーによる拡張用法である。しかし、前者は、直感的に理解しやすいが、後者は分かりにくい。分かりにくい理由として、まず比喻の普遍性が高くない（母語には無い）ことが挙げられる。加えて解釈自体が主観に頼り、客観的な根拠に欠けるためでもある。新しい用法が派生する際には、既存の用法との明確な関連が認められるが、使い慣らされて行くうちにその動因が曖昧になりがちである。然らば客観的な根拠は、派生時の用例に求められるべきであろう。もちろん現在の用法について考え

---

1) 木村1996: 117参照。

2) 安井1998: 145参照。

る以上、共時的立場からの解釈も必要ではあるが、通時的変遷をふまえた分析であれば、より説得力のあるものとなろう。

そこで本稿では、一つの試みとして、量詞“条”について用法の拡張とその動因を、歴史的文献に基づいて考察していく。また“条”に対比させるものとして、助数詞「本」についても通時の変化という視点で拡張の経緯を考えてみる。“条”と「本」を研究対象とするのは、典型的な用法——「細長い物を数える」——において共通するが、ともに使用対象が広範にわたり、互いに異なる用法も持つからである。そして、こうした比較的複雑な用法を持つものこそ、通時的変遷をふまえた分析がより妥当な解釈を示しうると考えたからである。以下、第1章では“条”について、第2章では「本」について、一部の用法の派生が、それ以前のどの用法と関連しどのようなスキーマの下で起こったかを考えていく。第3章では、“条”の用法の拡張過程と「本」のそれとを比較対照し、共通点と相違点を明らかにしていく。

## 1. 量詞“条”の用法と拡張のメカニズム

まず、中国語の量詞“条”の成立とその後の用法の拡張、および動因について見ていく。成立から現在までの変遷に関しては、孟繁杰2012がそれまでの研究成果をふまえて一定の道筋を示しているが、ここではなお不明な点をいくつか取り上げ議論していく。

### 1.1 量詞“条”の成立について

“条”は、本来「小枝」<sup>3)</sup>の意味を持つ名詞であったが、関連する事物を数える際に数詞とともに現れるようになり、その用法が広がることで量詞として認識されるようになった。孟繁杰2012: 40-41は量詞としての成立・発展の過程を大きく二つに分けている。一つは“条状”、つまり「細長い」の意味から転用されたものと、もう一つは“条令、条款”つまり「条項、規

---

3) 『説文解字』には「條、小枝也。從木攸聲。」と記されている。

定」という意味から転用されたものである。後者のタイプについて、孟繁杰 2012では次の用例を挙げ、“条”が後漢の時代にはすでに量詞へと機能語化したと主張する。

- (1) 今大辟之刑千有余条，律、令烦多。 《汉书》刑法志  
(2) 乐浪朝鲜民犯禁八条。 《汉书》地理志  
(3) 又增法五十条，犯者徙之西海。 《汉书》王莽传

これらの用法は、【(動詞+)名詞+数詞+“条”】の形で、実質的には“刑”“禁”“法”の数を述べている。とはいえ、必ずしも量詞用法と断言することはできない。“条”は原義の「小枝」から、前漢の時代には「条項、規定」の意味で用いられており、(1)～(3)の“条”もまた「条項、規定」の意味を持つ名詞という解釈が可能だからである。

この点について、日本語を例に考えてみよう。

(4) DAC によれば、「援助」が ODA として認知されるには次の三条項を満たす必要がある。(杉本信行『大地の咆哮—元上海総領事が見た中国—』)

(4)' 「援助」が ODA として認知されるには以下の条項を満たす必要がある。

(4)" 「援助」が ODA として認知されるには以下の三つの条項を満たす必要がある。

(4)の「条項」は数詞と直接結びついているが、だからといって助数詞といえるだろうか<sup>4)</sup>。(4)'や(4)"の場合、「条項」が名詞であることに異論はなからう。(4)'や(4)"の「条項」と同等な意味でありながら統語的環境のみに基づいて(4)の「条項」を助数詞とみなすことには、少なからず抵抗がある。こうした違和感を(1)～(3)の“条”についても覚えるのである。(4)の用法は、現代中国語の用語を借りるなら、准量詞あるいは臨時量詞といわれるタイプのものである。しかし、現代中国語で准量詞あるいは臨時量詞という下位カテゴ

---

4) 田中2012は、日本語の助数詞について「任意の数詞と結合して数量詞を成し、副詞的な位置に生起できる語」と定義し、数詞と直接結びついていても、一部は名詞であるとしている。例えば「リー氏ら3議員が面会した」「～など4大学を廃止し」の「議員」「大学」は名詞だと主張する。

リーが存在するのは、そもそも量詞、正確には個体量詞というカテゴリーが認められた上でのことである。後漢において、少なくとも文献上では、数詞を用いず量詞のみで事物の数を言う形式が一般的であった<sup>5)</sup>。したがって、(1)～(3)の“条”は、確かに量詞の先駆的用法ではあるが、当時の文法体系に鑑みれば、あくまでも【数詞＋名詞】構造と分析するのが妥当である<sup>6)</sup>。

では、量詞とみなせるようになるのは、どのような段階であろうか。それは、数を言う事物と“条”の意味的結びつきが希薄になった時である。

(5) 桓帝時，数有灾异，下策博求直言，儒上封事十条，极言得失，辞甚忠切。 《后汉书》卷五十三

(6) (邢臧)年二十一，神龟中，举秀才，问策五条，考上第，为太学博士。 《魏书》文苑传

(7) 若此传不虚众恨可言。今辄。略问数十条事。 《高僧传》卷第六

“封事”(上奏文)、“策”(方策)、“事”(事柄)は、個人の意見や質問であり、「条項、規定」のように、あらかじめ定められたものではない。したがって、これらの数を述べるにあたって共起している“条”は、もはや名詞「条項、規定」と解釈することができず、数を述べるために機能的な、あるいは文法上の必要から現れたものだといえる。このような段階に至ってはじめて、“条”は量詞として成立したと見ることができる。もちろん現在のように、文法体系においてすでに個体量詞というカテゴリーが認められている場合には、数を言う事物と原義とが意味的に近接していても、量詞として認めうる。しかし漢代においては、文法体系全体からいって、未だ個体量詞というカテゴリーそのものを認めがたく、その点において、(1)～(3)の“条”については、なお名詞だと考えられる。そして魏晋南北朝期に至って、「条項、規定」以外の「複数の項目にわたる事柄を数える」際に用いられることでは

---

5) 武丹2005によれば、数量構造に量詞を伴う形式と伴わない形式は、それぞれ漢代では1:9、魏晋南北朝期では、1:10である。この数値には、度量衡の単位を表すものやそれ以外の集合量詞も含まれているため、離散的な事物を数える個体量詞の使用は、極めて限定的であったと推測できる。

6) 量詞の成立については、橋本2014で詳細に述べている。

じめて、量詞として成立したといえる。

さて一方で、“条状”「細長い」の意味から転用されたものは、いつ頃成立したのであろうか。これについても刘世儒1965、黄盛璋1961、孟繁杰2012などでは次の例を挙げ、後漢には細長いものを数える量詞として現れたと指摘する。

(8) 披三条之广路，立十二之通門。 《西都賦》

(9) 条属者，通屈一条绳，若布为武，垂下为纓。 《礼记》杂记（郑玄注）

いずれも、現在の文法体系から考えれば、量詞とみなすこともできよう。しかし上述したように、後漢においては、量詞を用いず数詞のみで事物の数を言うのが一般的であったことをふまえて考えなくてはならない。まず、(8)では、“条”と“广路”の間に“之”が挿入されていることに注目したい。吴・冯・黄2006や张延俊2002では、【数詞+単位詞+“之”+名詞】という形式について、【数詞+単位詞】は実際の数量というよりも属性として描写したものだとして主張している。例えば、“六尺之孤”の“六尺”は、実際に六尺の背丈を表しているのではなく、六尺ほどの背丈になる年齢、すなわち14、5歳の意味である。同様に、“三条之广路”についても、“三条”は、実際の数量ではなく属性を表していると考えられる。つまり、「三本の広い道」ではなく「都の大通り」<sup>7)</sup>の意味である。12の通門が都の四方それぞれに3ヶ所ずつあるのであれば、東西南北合わせて6本の通りがあるはずであり、その点においても“三条”は実際の数値ではない。また、“三条”が実際の数値を言うのでないならば、当時の体系からいって、“条”は「筋」という意味の名詞と見るのが妥当であろう。(9)については、慎重な直接構成要素(IC)分析が必要である。“一条绳”は、可能性として“一|条绳”とも“一条|绳”とも分析できる。ただこの場合も、当時の体系を考えると、“一|条绳”と分析する方が妥当であろう。“条凳”(長椅子)や“条桌”(長机)と同様、複合語“条绳”=「長繩」があっても不思議ではない。むしろ自然である。

したがって、(8)や(9)の用例を以って、後漢までに「細長いもの」を数え

7) 三条路：都城的三条大道。亦泛指都城通衢。(《汉语大词典》1, p.222)

る量詞用法が成立したと断定することはできない。これらの用例では、あくまでも「筋」あるいは「長い」という意味での用法である。上述したように、「条」は「条項、規定」の意味から転じて、魏晋南北朝期に量詞として成立したと考えられる。(8)や(9)のような用例は、量詞へとつながる用法であるが、量詞という文法カテゴリー成立前、すなわち魏晋南北朝期より前においては、量詞として分析するべきではない。

## 1.2 “被子”はなぜ“条”で数えられるのか

前節で見たように“条”は「条項、規定」の意味から転用された用法により、量詞として成立したとみられるが、現代においてプロトタイプのといえるのは、「細長い」ものを数える用法である<sup>8)</sup>。では、量詞として成立した後の用法は、どのように拡張していったのだろうか。ここではまず、“被子”(かけ布団)を数える用法について見ていこう。

“被子”は、シングルサイズであれば長方形であるが、ダブルサイズならばむしろ正方形に近く、決して「細長いもの」とは言えない。また“手絹、手帕”(ハンカチ)も“条”で数えられるが、やはり一般的には、正方形に近いものである。これらは、どの用法から派生したのだろうか。

(10) 死得四片板，一条黄衾被。 《王梵志诗校注》卷一

---

8) 《现代汉语词典》第六版(商务印书馆, 2012)では、次のように記述されている(用例一部省略)。

- a) 用于细长的东西: 一~线 | 两~腿 | 三~鱼 | 五~黄瓜 | 一~大街
- b) 用于以固定数量合成的某些长条型的東西: 一~儿肥皂(连在一起的两块肥皂) | 一~儿烟(香烟一般十包包装在一起叫一条)
- c) 用于分项的: 三~新闻 | 五~办法

また、《汉语量词大辞典》(上海辞书出版社, 2013)では次のように記述されている(用例一部省略)。

- ① 用于细长或长条型的東西。现代口语有时可儿化: 一~线 | 几~绳子 | 一~项链 | 一~肠子 | 两~眉毛 | 一~毛巾
- ② 用于人或有关人的事物: 一~好汉 | 光棍一~ | 两~人命 | 一~金嗓子 | 一~心
- ③ 用于某些分项列項的事物: 六~诏书 | 几~政策 | 两~路线 | 五~原则 | 两~新闻 | 一~消息

(11) 起身除了首飾，脱了衣服，上得床，将一条綿被裹得紧紧地，自睡了。

(ccl: 南宋《话本选集》)

“被子”を“条”で数える用法は、(10)(11)のように唐代の詩にすでに見られる。またこれらの用例に前後する時期のトルファンおよび敦煌の文書では、次のような用例が見られる。

(12) 食单五条 《吐鲁番出土文书》

(13) 破纓緋眠单伍条 《吐鲁番出土文书》

(14) 所至千里，大布六条，皆多襦之谣，无谢龚黄之理。

《唐代墓志汇编续集》

(15) 身上一条云作被，面门多点雪成美。 《敦煌变文文集新书》

洪藝芳2000: 260は、(12)(13)の例について、“条”が柔らかい布類に用いられているとして挙げている。また洪藝芳2000: 167は、(15)の例について、当時雲は多くが“朵”で数えられていたが、“被”(掛け布団)に見立てるという表現のために“条”を用いたのだらうと指摘している。これはすなわち、この時期において“条”と“被”の結びつきが広く受け入れられていたことを示唆していよう。布類に関する“条”の用法は、“七条袈裟”(7枚の布でできた袈裟)、“九条袈裟”(9枚の布でできた袈裟)など、魏晋南北朝期にすでに見られる。これらのことから、“条”は、「細長い布類」から「布類」に拡張して用いられ、またそこから(15)に見られるような“条”と“被”とが関連付けられたと推測できる。もしそうであれば、“被子”を“条”で数える用法は、“被子”が「細長い」からというより、「布類」であることに拠ると考えられる。また、“手绢、手帕”が“条”で数えられることについても、“条”が「布類」を数える用法を持っていたとすれば、理に適う。もちろん、現在では「布類」であるがために“条”が用いられるわけではなく、かつての用法が現在まで淘汰されずに残ったものだ と解釈することができる<sup>9)</sup>。

---

9) 三保1989a, 1989bでは、奈良時代の日本の文献において「條」(=“条”)が、帯や紐以外にも、布や帳、覆い、掛け布団、敷布団など、布類を数えるのに用いた例が多数挙げられている。後述するように、日本語の助数詞のほとんどは、文書行政とともに中国から日本にもたらされたものであり、当初は中国語での用法に則して用いられたと推測される。

### 1.3 “狗”はなぜ“条”で数えられるのか

次に検討したいのは、“狗”を数える用法である。杉村1998は、民間語源的な説も含め4つの仮説について検証している。すなわち、「細長いという体形」、「屠殺されて吊るされた形状」、「尾の形状」、そして「“白条”（すっぽんぽんで棒状）のイメージ」に由来するというものである。現在の用法から見れば、どれも一理あり、しかしどれも決め手を欠く。そこで、本稿では“狗”が“条”で数えられるようになった用法を検証し、「大きいもの」という第5の仮説を示したい。

(16) 行者即忙拔下一根毫毛，吹口仙气，叫：“变！”变作一条黄犬跑入场中，把那道士头一口衔来，径跑到御水河边丢下不题。 《西游记》

(17) 门口锁着一条大黑狗，拴在那里，瞧见人就站起来狂吠。 《彭公案》

(18) 当院里两条天狗，因抢着一个血淋淋的东西，在那里打架。

《儿女英雄传》

明代の用例は、現在までのところ“黄犬”の例しか見つかっていない。(16)の“黄犬”は、道士の頭をくわえて来たというのだから、決して小型犬ではないだろう。(17)(18)は清代の用例であるが、“大黑狗”“大狗”、つまり大型犬であることが示されている。(17)(18)はそれぞれ《彭公案》《儿女英雄传》の用例であるが、同書には“狗”を“条”以外の量詞で数えた例がある。

(19) 方要退堂，忽见一只黄狗跑上了公堂，连蹿带跳，嘴里咬着一只靴子。 《彭公案》

(20) 他怕湿了衣裳，连忙站起来一躲，不防他爱的一个小哈巴狗儿正在脚踏底下爬着，一脚正踹在狗爪子上，把个狗踹得踹踹成一团儿。

《儿女英雄传》

(19)では“黄狗”が“只”で数えられている。“黄狗”の大きさは不明であるが、走ったり飛び跳ねたりという身軽さ、くわえて来たのが「靴」であることから、(16)の場面と比較して、小型犬をイメージさせる。(20)では、“哈巴狗儿”が“个”で数えられている。そもそも“哈巴狗儿”は小型犬であるが、さらに“小”という形容詞を伴っている。

また牛について、一文中に“条”と“只”の二つの量詞を用いている例が

ある。

(21) 一个牧童骑着一只白牛，腾空而起，只剩得一条青牛在这里，没发落处。  
《三宝太监西洋记》

ここでも、牧童がまたがった白牛は、空中に舞い上がるというのだから、身軽なイメージであるが、“只”で数えられている。それに対して地上にとどまっている青牛は、“条”で数えられている<sup>10)</sup>。

こうした用例から、本稿では“狗”を“条”で数える用法は、“只”や“个”に対し、大きな犬を数えるべく用いられていると考える。現代においても“条”で数えられる“狗”といえ、長いと同時に大きい犬をネイティブスピーカーはイメージする<sup>11)</sup>。

では、“条”が「大きいもの」を数えるとするなら、そうしたスキーマは一体どこから来たのであろうか。この点については、“好汉”や“大汉”を“条”で数える用法からの類推だと考えたい。

(22) 三条好汉、三条朴刀，唬得五个人顶门上荡了三魂，脚下走了七魄，两个使马底都走了，只留下万秀娘、万小员外、当直周吉三人。  
(ccl: 南宋《话本选集》)

(23) 若是明日再来打搅俺这衣饭，我选几条大汉，打杀你这泼先生。  
《全元曲》

(24) 三尺宽肩膀，灯盏也似两双眼，直挺挺的立地，山也似不动惮。咳，正是一条好汉。  
《朴通事》

“好汉”や“大汉”を“条”で数える用法は、“狗”を“条”で数える用法より早く、宋・元代の文献に見られる。“好汉”や“大汉”は、手足が長く、背が高い、すなわち縦方向の印象が比較的強いいため、その様子をイメージさせるべく“条”を用いたのであろう。それ以前に腕や足が“条”で数えられていたことも、こうした類推を促したことは容易に想像される。そして人に

---

10) 《彭公案》には、“狗熊”(ツキノワグマ)を“条”で数える用例がある。

・欧阳德往外一瞧可真是一条大狗熊。

11) 杉村1998:27参照。

ついて、一般的には“个”で数えるが、“好汉”や“大汉”ならば“条”で数えるのに相対応し、“狗”についても、小型犬を“只”や“个”で数えるのに対し、大型犬ならば“条”で数えたというわけである<sup>12)</sup>。つまり、犬に対応させた時点では、「細長い」というよりも「大きい」というスキーマに基づいたものだと考えられる。“好汉”や“大汉”は、縦と横の比率からいけば、「細長い」ではあるが、一方でやはり「大きい」という属性を持つものでもある。また、〈大きいもの〉というスキーマを認めれば、牛を“条”で数える用法についても説明できる。牛を“条”で数える用法については、その尾の形状から来ているという説もある<sup>13)</sup>。しかし「尾」や「頭」など部分で全体を数える用法はあるが、部分を数える量詞で全体を数える用法が一般的ではないことは、杉村1998: 28でも指摘されているとおりである。例外的なメカニズムを考えるよりは、〈大きいもの〉というスキーマを認めた方がより合理的である。したがって、“狗”を“条”で数える用法は、「細長いもの」から「大きいもの」を数えるというスキーマ転換が起こって成立したものだとの解釈を提起する。

#### 1.4 “心”はなぜ“条”で数えられるのか

第三として、“心”を“条”で数える用法について考えてみる。

“一条心”は、単に心臓や心持ちの数が一つであることを言うのではない<sup>14)</sup>。《現代汉语词典》第六版に“相同的意志；相同的心意”（同じ意志、同じ気持ち）とあるように、他の誰かと意志や気持ちが同じであることを言う。そのためか、“心”を“条”で数えることについて、安井1998: 145は「心は相手につながるもの → 伝達の経路」であるからと説明している。宗

12) 大型犬といっても、虎や熊ほどには大きくないため、“头”が採用されにくかったとも考えられる。しかし、p. 10 注10)に挙げたように、熊を数える際にも“条”が用いられたことを考慮すれば、それが一般的な用法ではないにせよ、やはり〈大きいもの〉というスキーマを認めたい。

13) 木村1996: 143参照。

14) 内臓器官としての心臓を数える場合には、“颗”を、心持ちの数に言及する場合には、“个”を用いる。儲泽祥2014: 75-76参照。

守云2011: 53も“两个人一条心”について“把两个人的心连在一起，其长条状是不难理解的。”（二人の心をつ一つ繋げるのであるから、それが細長い形状を持つことも理解できる）と指摘する。

一方で、儲泽祥2014は宋代・明代の用例を挙げ、“一条心”が“一条心路／心肠／心愿”から“路／肠／愿”が落ちたものだとしている。

(25) 这一条心路只是一直去，更无它歧；才分成两边，便不得。

《朱子语类》卷四十二

(26) 谁知倪善继与做爹的不是一条心肠。

《喻世明言》

(27) 赵某旧有一条愿心，许剃一僧在上刹。

《水浒传》

(28) 不但这样，还要给她立命安身三那时才算完了老哥哥的差，了结了我的一条心愿。

《侠女奇缘第16回》

儲泽祥2014では、“心路”は考えの筋道や考え方を道に喩えたことから、“心肠”は“肠”であることから“条”が用いられたと分析している。ただ“心愿”について、儲泽祥2014は長くて柔らかい実体のあるものに喩えたため“条”を用いるとしているが、具体的にはいかなるものといかなる共通点を持つのかは不明である。

(25)～(28)の用例では、“条”で数えるものが、いずれも気持ちや考えを表している。気持ちや考えは、「断腸の思い」とも言うように、表現上においても腸と深く関わっている。“肠子”“肚肠”は、気持ちや考えという意味でも用いられるが、以下の例のように“条”と共起しうる。

(29) 罢、罢、罢，我和你两个，恩断义绝。血脏牵车儿，扯断这条肠子罢。

《全元曲》

(30) 见婆子领了狄希陈来到门上，看见婆子没甚怒意，见儿子无甚愁容，方才放下了这条肚肠。

《醒世姻缘传》

(31) 那李清方才放下了这条肚肠，起来拜谢出门。

《醒世恒言》

これらの点から考えると、“心愿／愿心”は、“肚肠”と同じく気持ちや考えという意味を持つからこそ“条”と結びついたり見方がより自然であろう。そして、「気持ちや考え」は“条”で数えるというスキーマが成立したからこそ、“路／肠／愿”が省略され“心”のみとなっても“条”と結びつ

くのである。

“一条心”という表現が「同じ意志、気持ち」を表すことについては、“我们是一个班”において“一个班”が「同じクラス」という意味になるのと同一の用法である。したがって、“心”の場合のみ、こちらとあちらをつなげるから“条”を用いる、と解釈するのは根拠に欠ける。また、“横下一条心”（心を鬼にする）についても、考えを遮断する、切り離すの意味であり<sup>15)</sup>、“心”そのものが長いと見るべきではない<sup>16)</sup>。やはり、「気持ちや考え」を“条”で数えた例と見るべきであろう。

### 1.5 “新闻”はなぜ“条”で数えられるのか

ニュースや法律、契約、意見、理由などが“条”で数えられることについて、Tai and Wang 2000: 42は、抽象的レベルで細長いものであるからだとして解釈している。そして、これらが文書化されがちなものであり、書かれた文字列が細長い形状をとっていることが、“条”を用いる根拠だとする。しかし、法律が文書上細長く記述されていることは認めるにしても、ニュースや契約についても、文字列ありきの存在だといえるだろうか。ここでは、ニュースが“条”で数えられるようになった経緯について見ていく。

(32) 当下两人你商我量，定下一条计策，齐声道：“妙哉！”

(ccl: 南宋《话本选集》)

(33) 兄弟倒有一条计在此。

《杀狗记》

(32) “计策”と“条”の結び付きは、1.1の(5)(6)で挙げた“下策”“问策”からの類推と考えられる。“计策”もまた、意見や考えのように一定の内容を持った事柄であり、しかも“策”という語を含んでおり、それまでの用法に準じて“条”が用いられたのであろう。(33)の“计”もまた然りである。ただし、この用例では“计策”“计”がただ一つであって、複数ではないこ

15) 例えば“青山横北郭，白水绕东城”（李白《送友人》）では“横”が遮断するの意味で用いられている。

16) 宗守云2011: 53は、心を細長いものと見立てた用法だとしている。

とに注目される。それ以前の(5)(6)などの用法では、枝分かれ状になっている、つまり複数個あることが“条”を使用する一つの条件であったが、(32)(33)の例文では、その条件にあてはまらない。すなわち「一定の内容をもった事柄」を数えるという用法となっている。そして、こうした用法が、宋、元代の文献に見られ、現在もなお用いられている。

(34) 一条“美人计”昨陷落二官员？

(<http://blog.people.com.cn/article/1313489105151.html>)

(35) 这是25年前的一条新闻，现在仍然是新闻！

(<http://www.0722h.com/news/21099.shtml>)

(36) 他从《解放军报》上看到了一条消息。 (ccl: 1994年报刊精选)

“美人计”が、仮に文字に書かれて細長い形状で以って存在していたとしても、それは“美人计”が常に有する属性とは言えない。やはり、「一定の内容をもった事柄」だからこそ、“条”で数えると考えたい。また、“新闻”についても、小見出しはさておき、ニュースそのものは音声のみによって伝達されることもあり、細長いとは言えない。同様に、“消息”についても「話し手から聞き手への情報の伝達経路」<sup>17)</sup>といった導管メタファーを想定するよりも、“新闻”からの類推と考える方が自然である。したがって、“消息”もまた、〈細長いもの〉というスキーマではなく、〈一定の内容をもった事柄〉というスキーマの下での使用だと考えられる。

## 1.6 量詞“条”の多義的ネットワーク

以上、量詞“条”の成立とその後の用法の変遷について見てきた。本章のまとめとして、その経緯を図1に示す。

図1は、歴史的文献に基づく用法の拡張を示したものであって、現在の使用条件とは必ずしも一致しない。この点については、3章であらためて議論する。

---

17) 安井1998: 145参照。

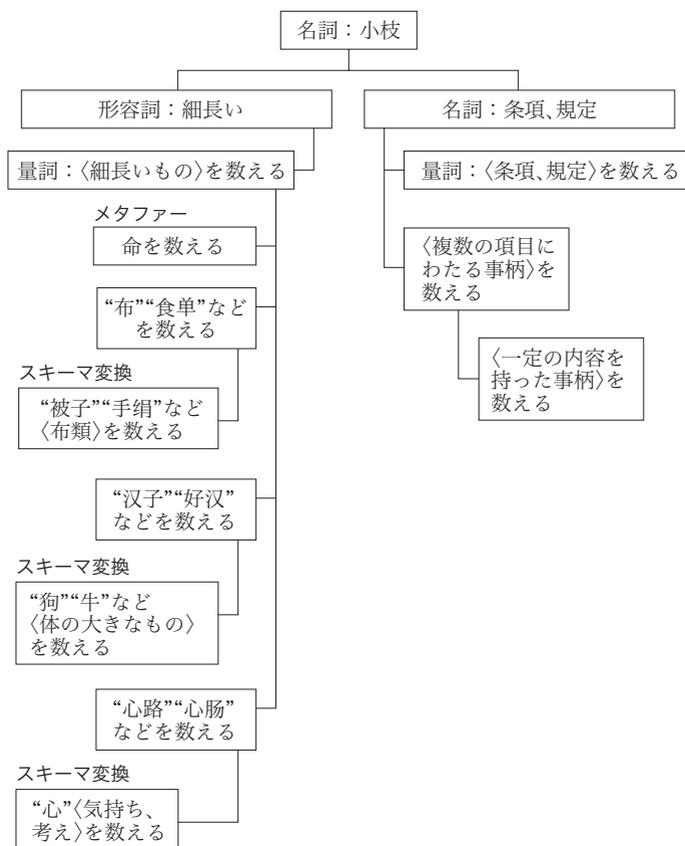


図1 量詞「条」のネットワーク

## 2. 助数詞「本」の用法と拡張のメカニズム

次に、日本語の助数詞「本」の初期的用法とその後の用法の拡張、および動因について見ていく。助数詞「本」の通時的変遷については、王鼎2009に詳しいが、ここではまず「細長いもの」を数える用法の始まりについて再検討し、また現代的用法のうちなお不明な点をいくつか取り上げ議論していく。

## 2.1 助数詞「本」の初期的用法と二つのルート

三保2006: 31によれば、日本語の助数詞は、中国語の量詞を「常用する場面、すなわち、文書行政とともに日本にもたらされた」とみられる。では、中国語から伝わる以前にすでに用いていたものはないのかというと、どれがそうであるのか、つまり固有のものがあるのかどうかははっきりしないという。そもそも文字資料が非常に少なく、遺存量が急増する8世紀以降はすでに外来の文字があふれていたためである。固有のものがあるとみる場合根拠とするのは、「本」について言えば、次のような植物を数える用法である。

(37) 質美良比登母登<sup>18)</sup>(ニラー本) 『古事記』上つ巻

(38) 五本<sup>柳</sup> 『万葉集』巻二十

しかし、『古事記』にしる『万葉集』にしる、その成立は8世紀以降であるから、これらの例が、日本固有のものであるという根拠は薄弱である。

中国語において量詞“本”は、魏晋南北朝期に、植物と書物を数える用法が見られる。

(39) 汉武帝元鼎六年，破南越，建扶荔宮，以植所得奇草異木，有<sup>甘蕉</sup>二本。  
《南方草木状》卷上

(40) 河北此<sup>田</sup>家藏一本。 《颜氏家训书证》第十七

中国語の“本”が植物を数えるのに用いられたのは、植物の「ねもと」の意味から、つまり部分で全体をいうメトニミーによる。“本”が書物を数えるのに用いられたのは、「底本」「版本」などの意味から、つまり生産物を素材(もと)でいうメトニミーによる。これらの用法は、魏晋南北朝期のものであるため、量詞とみなしうるが、極めて初期的な用法である。その後中国語の“本”の方は、書面語において植物を数える用法を維持し、口語では多くが書物や帳簿、あるいは脚本を介して映画を数えるのに用いられている。若干の拡張用法はあるものの、汎用性という点で日本語の「本」には及ばない。

一方、日本語の助数詞「本」についても初期的用法において確認できるの

---

18) この用例では「本」を「もと」と読ませている。

は、実のところ植物と書物を数える用法のみである<sup>19)</sup>。偶然の一致である可能性も否定できないが、時系列から考えれば中国語の“本”の用法が日本に伝わったと見るのが自然であろう。

由来の議論はさておき、ここで着目したいのは、助数詞としての初期段階における「本」が、「細長いもの」に用いられていなかったという点である。「本」が「細長いもの」に用いられるようになるのは、王鼎2009: 66によれば中古期であり、「錫杖」「杵」の例を挙げている。

(41) 弘輪寺 [中略] 鐵錫杖壹本 [中略] 木杵壹本

(九條家本延喜式裏文書『上野國交替實録帳』、王鼎2009より引用)

王鼎2009: 62-65は、同じく中古期に柱類を数えるのに「本」を用いていることについて、「〈もとを持っている〉ものを数える用法」としている。その理由は、柱以外の材木——「材木」「比曾」「垂木」「梁」などが「本」で数えられておらず、「支(枝)」で数えられているからである。確かに、柱以外の材木のうち、「材木」や「梁」は「もと」と言える部分をここと定めたいが、「垂木」や「飛簷」(ひさし)は、棟から軒先に伸びているものであり、棟木と接している部分を「もと」とみなすこともできる。にもかかわらず「垂木」や「飛簷」が「本」で数えられないのは、「もと」を持っていないからではなく、植物のように垂直方向に伸びていないためだと考えられる。柱類は、木であるとともに、垂直方向に伸びているが故に「本」で数えられるのであり、そう考えれば、「錫杖」「杵」が「本」で数えられるのも同じスキーマで説明できる。つまり、「本」は中古期に至って、植物を数える用法から拡張し、「錫杖」「杵」や「柱」など「垂直に伸びている細長いもの」を数える用法を獲得したというわけである。

その後、中世に至って「刀」「矢」「筆」「針」「髪の毛」あるいは魚類なども「本」で数えられるようになった<sup>20)</sup>。

---

19) 王鼎2009: 59では「犀角」を数える用例を挙げつつ、しかしそれが後に加筆されたものである可能性を排除できないとしている。

20) 王鼎2009: 69-70参照。

(42) ようさいて<sup>刀脇ざし</sup>たつた二本。 『近松全集』第十一卷

(43) 肴かけにハ二番の<sup>鯛一本小鯛五枚鱈二本</sup>。 『世間胸算用』巻一

ここにきて「垂直」という方向は喪失され、「細長いもの」という属性が「本」を使用する十分条件になったと考えられる。上述のように、中国語の“本”には、「細長いもの」を数えるという用法はない。したがって、日本語の「本」は、中国語から語彙を取り入れ、その後独自に発展し、今日ではその後発の用法こそが、中心的な用法となったと推測できる。

## 2.2 「細長いもの」を数える用法からの拡張用法

さて「細長いもの」を数える用法は、その後も新しい事物の登場とともに、ネットワークを広げている。例えば、野球のヒットやホームランを数える用法である。この用法について Lakoff 1987: 105-107は、細く長いもののスキーマが軌道のスキーマへ変形していると指摘する。その理由として、ファウルや凡フライ、ゴロ、バントなどには「本」を用いないこと、バスケットボールのシュートや、バレーボールのサーブ、卓球のラリーにも「本」を用いることなどを挙げている。また、これらは単に軌道のスキーマを持つだけではなく、得点（主要目標の達成）の可能性を含んでいるとする。後者の要素が大きく関与していると思われるのが、ラグビーのトライの数え方である。

(44) キヤノンはこの試合で前半2本、後半3本の計5本の<sup>トライ</sup>をあげ、  
ボーナスポイントを獲得。 ([http://www.city.machida.tokyo.jp/](http://www.city.machida.tokyo.jp/bunka/sport/supomachi/hometownteam/canoneagles/spomachi530.html)

[bunka/sport/supomachi/hometownteam/canoneagles/spomachi530.html](http://www.city.machida.tokyo.jp/bunka/sport/supomachi/hometownteam/canoneagles/spomachi530.html))

トライは、相手陣地のゴール領域で選手がボールを手で持って接地させるものであるから、ゴールキックの場合と異なり、軌道を描くわけではない。そうであるにもかかわらず、トライを「本」で数えるのは、むしろ「得点につながるもの」という一般化による拡張が起こったと考えられる。日常的なスポーツの場面でも、「一本取るよ」といった具合に、選手同士でも、また応援するものも声を掛け合うが、やはり軌道というより「得点」をイメージしてのことである。そもそも軌道を描くことが「本」を使用する動機であるが、その軌道の結果としての「得点」をも数えるのであり、これは原因で結

果を言うメトニミー<sup>21)</sup>に通じる用法である。

こうした球技に関する得点のほかに、剣道や柔道などの武道においても決まり手を「本」で数える。これは剣道の竹刀が、的確かつ適切に相手を打突することから来ているのは言うまでもない。竹刀を持たない柔道や空手でも「本」が用いられるのは、心技体が揃って相手に技をかけるという点で共通しているからであろう。柔道や空手において「本」が使われる際にも、「細長いもの」という要件は捨象され、「決まり手」を数えるものとして一般化されている。

さて、小出2003: 8-9はこのスキーマをさらに一般化して「活動の結果、成果」というスキーマを想定し、その具体例として「当たりくじ」を数える用法を挙げている。その理由は、空間的にも時間的にも、「本」の持つ一次的で有限的な広がり、「当たりくじ」に認められない以上、「本」で数える事物に共通する構造的類似性を想定せざるを得ないからだという。しかし、スポーツの場面で用いる「本」と「当たりくじ」に用いる「本」はあくまでも別のイメージスキーマの下に使用されているというのが、一母語話者としての直感である。助数詞「本」の用法は「もと」という一つの意味から派生したものだからといって、必ずしもすべての意味・用法に共通性があるというわけではない。全体としては緩やかなつながりがあるにしても、ある意味から派生した意味と別のある意味から派生した意味に、直接的な関連が無いこともありうる。「本」で数えるからといって、細長いものと得点、決まり手、さらに映画や論文、仕事なども一つのイメージスキーマにくくりつけ、そこから「当たりくじ」を数える用法を創出すると解釈するのは、無理があろう。「当たりくじ」を「本」で数える用法は、「くじに細長い棒を使うことに由来」<sup>22)</sup>し、道具で結果あるいはプロセスを表す用法と見る方が直接的である。それが、細長い棒を用いない場合にも、「懸賞や当籤数」を数えるものとして一般化されたものであろう。

---

21) 例えば「筆をとる」→「書く」、「ユニフォームを脱ぐ」→「引退する」も同様である。

22) 飯田2004: 388参照。

もう一点、「細長いもの」から派生したものとして手紙や電話を数える用法がある。Lakoff 1987: 108-109は手紙について、1) 元来手紙は巻物になっていた、2) ペンを使用する、3) コミュニケーションに対する主要なメタファーである導管メタファー (CONDUCT metaphor) を根拠に「本」が用いられていると主張する。まず手紙を「本」で数える用法が、細長いペンを用いることに由来するのであれば、道具で生産物を表すというメタファーである。確かに、「推薦文一筆」のような表現は存在する。しかし、手紙と「本」は生産物と道具ではなく、生産物と道具を数える助数詞という関係になる。こうした間接的な用法については、1.3でも述べたように懐疑的にならざるを得ない。

では、導管メタファーはどうであろうか。

(45) 一つの文に、多くのことを詰め込み過ぎてはいけない。

(46) 君の言いたいことは十分に伝わったよ。

(47) 英語が通じない国もある。

日本語においても、コミュニケーションは導管メタファーに深く関与している。しかし、助数詞に関して導管のイメージを直接的に表しているのは、「本」ではなく、(47)にもあるように、「通」の方であろう。「本」が用いられるのは、一般に手紙や電話のみであるが、「通」は手紙や電話以外に、FAXやメールにも用いられる。この点から言っても、導管メタファーに基づいて用いられるのは「通」だと考えるべきである。

さて残るのは、元来巻物になっていたからという使用動機である。巻物というのは、いささか仰々しいが、毛筆で書くなら折り畳んだとしても厚みが出るため、その形状を以って「本」を使用した可能性は否定できない。ただ、手紙を「本」で数える用法は、それほど一般的に用いられているわけではない。

(48)?? 三本の手紙が来た。／??手紙が三本来た。

(49) 三通の手紙が来た。／手紙が三通来た。

(50) 手紙一本よこさない。／一本も手紙をよこさない。

(51) ?手紙一通よこさない。／一通も手紙をよこさない。

(48)(49)の比較からわかるように、より一般的に用いられるのは「通」である。「本」は(50)のように、極端な例示として挙げられるような場面で用いるのがよく、その場合にはむしろ「通」で数えるよりも容認度が高くなる。また同様な場面では、厚みのないはがきですら「本」で数えられる。

(52) はがき一本よこさない。

この点に関して『角川古語大辞典』（角川書店）での解釈は示唆的である。該書は「一本」の項で「書状、書簡を数える単位。ただし、たったひとつ、の意で用いるのが普通」と説明している。「一本」という語は、他にも「一本やり」「一本道」「一本気」「一本調子」などのように、多様性が無く、それのみ、「たったひとつ」であることを示す場合に用いられる。そうした「一本」の言葉の持つ意味が、書いてある内容はともかく、手紙やはがきさえよこさない、存在がないという場面に使うことで、より表現効果を上げている。「通」が手紙のコミュニケーション機能に着目した助数詞であるなら、「本」は存在する形状、形態に着目した助数詞だと言える。

一方、電話について Lakoff 1987: 108 は、1) 受話器が細長い、2) 電話線がある、3) 導管メタファーのイメージに合致するとしている。受話器が細長いから電話を「本」で数えるというのは、携帯電話のような形で電話という道具が登場したのならばともかく、部分のみに着目し、それを数える助数詞で全体の助数詞と成すということであり、無理があろう。1.3で述べたように、全体を数えるのに部分を用いることはあるが、それは「頭」や「尾」のように、それ自身が全体の一部なのであって、一部を数える助数詞を用いているわけではない。導管メタファーについても、上述したように、「通」が担う意味であるため、電話の場合にも当てはまらない。では、電話線の形状から「本」を用いることについては、どうであろうか。まず、電話の回線を言う場合においては、全く異論がない。しかし、通話について言う場合には、「本」が導管メタファーから来ているものではないことから疑問が残る。電話の回数を数える際、電話をかけるだけ、あるいはかけても要件が伝わらない、相手が出ない場合には「回」が用いられ、相手に要件が伝わった場合

には「本」が用いられる<sup>23)</sup>。言い換えれば、「回」は単に電話をかける回数、すなわち動作の回数を表し、「本」は通信の内容が、相手に移ったことを数える、すなわち情報の移動というコトを数えるのである。手紙を「本」で数える用法は、内容はともかく物理的な意味で、手紙が相手の元へ届く際に用いられるが、これもまた情報の移動といえる。「本」で電報を数える用法も然りである。以上のことから、電話を「本」で数える用法は、〈情報の移動を実現する道具〉として手紙を数える用法からの類推と考えられる。

### 2.3 「書物」を数える用法からの拡張用法

「本」の初期的用法では、植物を数えるもの以外に、「書物」を数える用法を有したが、この用法からはどのような拡張用法が生まれたのであろうか。

「書物」を数える用法は、具体的な書籍をその素材ともいべき「本」(もと)で数えるものだが、「書物」は書物となりうる文芸作品や脚本、あるいは研究書などに置き換えられてもまず違和感はないであろう。これは、上位カテゴリーを下位カテゴリーで置き換えるという、シネドキシだからである。

(53) もう一本、今ちょうど映画が公開されてるんですけど、そっちは今年の夏に書いた脚本だったりするんですよ。

(<http://www.mikageya.com/you/19/index2.html>)

(53) のような用例は、文芸作品が翻案されたものや脚本をもとに上演されるお芝居や映画を、「本」で数えることにつながる。

(54) (三池崇史は) 同じく2004年、人気脚本家・宮藤官九郎脚本、哀川翔主演100本記念作品のヒーローアクション映画『ゼブラーマン』を監督。

(<http://dic.nicovideo.jp/a/%E4%B8%89%E6%B1%A0%E5%B4%87%E5%8F%B2>)

(54) の用例では、俳優側の作品数として「本」で示している。書物を数える「本」の用法は、「冊」のように形状に着目したものではなく、版本や底本と

---

23) 飯田2004: 387参照。なお、電話は他にも「件」「通話」で数えられることがある。「件」は電話による相談やリクエストなどの場合に用いられ、「通話」は電話会社の立場で数える際に用いられる。

いった内容に関わる意味から来ている。したがって、映画にしるお芝居にしる、その脚本と内容的には一致しているという点も、「本」で数えることを促したのであろう。

脚本、台本に対して上演したものという関係性から言えば、他にもテレビやラジオのドラマやトーク番組、そしてCMもある。(54)の用例にもあるように、こうした用法は脚本家のみならず、出演者やプロデューサーほか番組制作に関わる人たちの立場からも「本」で数えるため、そこから仕事の数を言う際にも用いられる。

(55) 一日三本の仕事をこなすため今日は気合を持ってのぞみました。

(<http://ameblo.jp/manabu-kitabeppu/entry-11886170075.html>)

トーク番組やCMが「本」で数えられるならば、それらを総称する「仕事」を「本」で数えることは、シネクドキによる表現と見ることができ、日常的に用いられる。

ドラマやCM以外に、ゲームやコンピュータなどのソフトも「本」で数える。これらも、元となる内容(プログラム)があって、それを多くの人が目にする、手にする(CD-ROMやインターネットからダウンロードする)ことができるという点では、脚本とドラマに平行する関係を認めることができる。

製品化できる、あるいは複製できるものといえば、映画やドラマを録画したビデオテープも「本」で数えられる。この用法についてLakoff 1987: 107-108は、テープというのが細長いものを巻いたものであることを私たちが知っているため、その慣習的なイメージに従って、「本」を用いるのだと説明している。確かに、ビデオテープやカセットテープは「本」を用いるが、セロハンテープやガムテープについては、「巻き」を使う方が一般的である。飯田2004: 386ではその相違について、減るかどうか、つまり消費して無くなるかどうかにあると考えている。一方で、アルミホイルが「本」で数えられることについては、「巻きつける部分が細長い」ためとしている。飯田2004が指摘するように、アルミホイルやラップは、それが巻かれているかどうかより、一見した形状の方がより私たちの注意を引く。セロハンテープやガムテープもまた、一見して巻かれているのが明らかであるからこ

そ「巻き」を用いるのである。しかし、ビデオテープやカセットテープは、わざわざ引き延ばした状況が私たちの着目しやすい特徴なのだろうか。セロハンテープやガムテープは、引っ張り出してこそ用を成すものであるため、テープの伸びるイメージが理由になるなら、「本」を用いるのはむしろこちらである。ビデオテープやカセットテープのテープ部分を引っ張り出すのは、特別な意図があつてのことである。細長く伸びている部分は見えるとはいへ、大部分は巻かれているのが通常の状態である。では、なぜビデオテープやカセットテープに「本」が用いられるのか。それは、映画やドラマ、あるいはトーク番組を「本」で数える用法があつて、その内容はそのままに、ビデオテープやカセットテープという形態に収めたモノであるからにほかならない。「書物」を意味する「本」が、脚本（シネクドキ）からドラマ（メトニミー）、さらにそれを保存したビデオテープ（メトニミー）へというように、少しずつ数える対象を拡張させた結果なのである。

一方、研究書を数える用法からは、書籍の形にこそ成っておらずとも、それに準ずるものとして論文もまた「本」で数えられる。そして論文が「本」で数えられることから、課題・仕事として作成されるようなレポート<sup>24)</sup>も「本」で数えられる。さらには、レポートからの類推で、新聞・雑誌などの記事やニュースも「本」で数える。これらの用法もまた、共通点に依拠して少しずつ使用対象を拡張、あるいはカテゴリー化させたものである。その結果、全体としては〈一定のまとまった内容を持つもの〉というスキーマを認めることができる。

文芸作品や脚本の方についても、書物からビデオテープやソフトまでの全体を俯瞰すれば、やはり〈一定のまとまった内容を持つもの〉という大きなスキーマの下にあるといえよう。

---

24) 飯田2004:321によれば、報告内容を意味する場合は「件」で、報告書は「報」「通」「枚」で数える。

## 2.4 助数詞「本」の多義的ネットワーク

以上、助数詞「本」の初期的用法とその後の用法の拡張について見てきた。本章のまとめとして、その経緯を図2に示す。

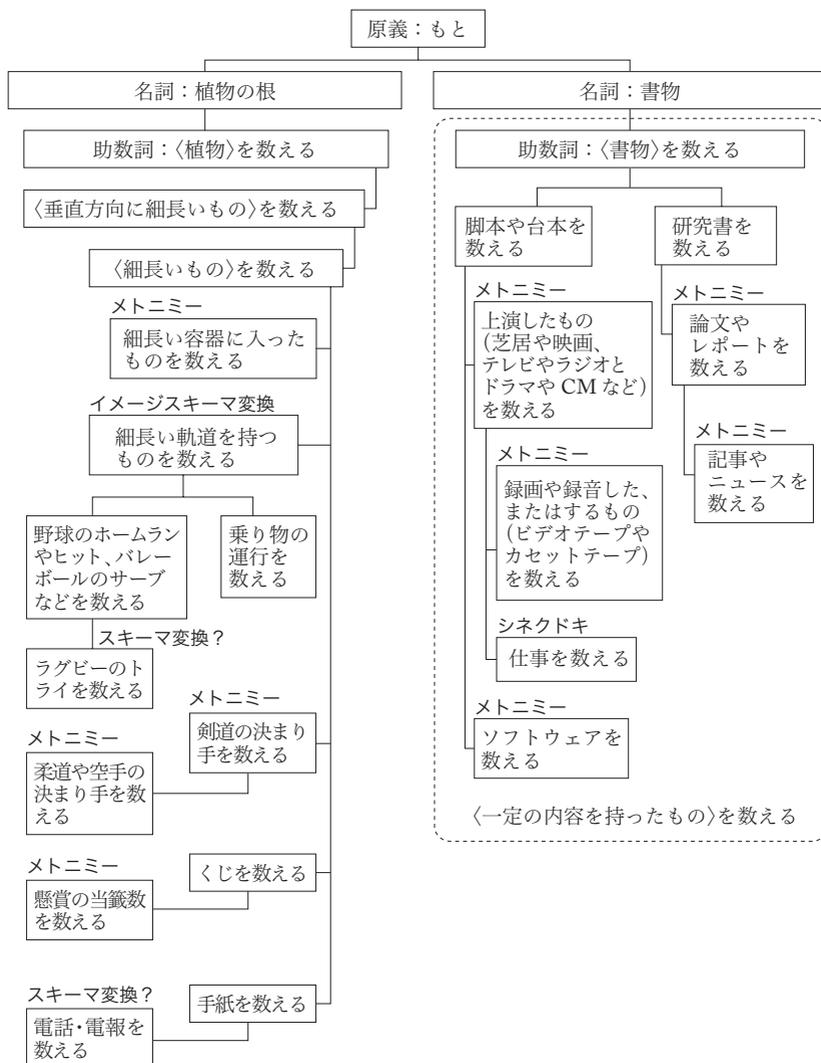


図2 助数詞「本」のネットワーク

### 3. 考察

以上、中国語の量詞“条”と日本語の助数詞「本」について、用法の拡張とその動因について見てきた。ここでは、両者の発展の経緯を対照して指摘できることを3点挙げる。

まず指摘したいのは、“条”と「本」は「細長いものを数える」という中心的用法については共通しているが、原義においてもまた拡張的用法においてもそれぞれ異なっているということである。したがって、拡張的用法において、ある事物を“条”でも「本」でも数えるからといって、それが必ずしも「細長い」というプロトタイプ属性に基づいたものではないということである。

例えば情報に関わる事物についてである。日本語では、手紙や電話、あるいはニュースや記事を「本」で数え、中国語では、“短信”や“消息”“新聞”を“条”で数える。“一条短信”の用法について、宗守云2011: 54は“从发信人到收信人是一条通道，这种通讯行为也符合管道隐喻性质”（メールの送り手から受け手までは一本の通路となっていて、こうした通信行為もまた導管メタファーの性質に合っている）と主張する。また Tai & Wang 1990: 42も、精神文化の産物は、文字列という細長いもので記録されていることから、“消息”“新聞”が“条”で数えられるという。しかし、1章で見たように、中国語のこれらの用法は、項目を立てて数えられるようなものを数える用法から来ているのであり、細長いものを数える用法から生まれたものではない。また日本語についても、2章で見たように「一定のまとまった内容のあるもの」を数える用法から来ているのであり、細長いものを数える用法から生まれたものではない。加えて、導管メタファーを持ちだすならば、日本語においても中国語においても「通」「通」の方がより符合する。

すなわち、プロトタイプ属性が同等である語彙について、拡張的用法が一致しているからといって、中国語と日本語が同一のメタファーに基づく、あるいは、同一のカテゴリ化を行っているとは断言できない。もちろん、一致する場合もあるであろう。しかし、そう判断するには、単に一部の現象の

みを取り上げるのではなく、当該語彙の多義的ネットワーク全体を鑑みて慎重に判断するべきである。

次に、拡張的用法は、プロトタイプ属性との関連付けによって維持されることを指摘したい。

情報に関わる事物を、“条”や「本」で数えるのは、実際のところ「細長い」という属性から生まれた用法ではない。しかし、Tai & Wang 1990や宗守云2011などが主張するように、現実には少なからぬ人が「細長い」と関連付けて認識している。歴史的経緯とは別に現在において情報を「細長い」と関連付けることもまた一つの認知活動であり、重要な意味を持っている。例えば、牛は、《現代汉语八百词》増訂本（商务印书馆）に“头，条”で数えると記載されているが、“条”でも数えうるということを知らない人が少なくない。ネイティブスピーカーの内省によれば、牛は「細長い」というイメージでとらえにくいという。一方、犬の方はその胴体や足の長さによって、「細長い」イメージに結びつくという。さらには布団やハンカチについても、布団は長く丸めて置かれているイメージがあり、ハンカチは女性が端をつまんで細長く垂らしているイメージがあるという。こうした民間語源的なイメージが、他でもなく“条”の使用を維持していると考えられる。1.4で述べた“一条心”についてのイメージや情報についてのイメージもまた然りである<sup>25)</sup>。

日本語の場合、手紙や電話が「本」で数えられるのに対し、FAXや電子メールは「本」で数えられないが、これはプロトタイプ属性との関連付けが困難なためである。FAXは、電話線を通じて発信者から受信者に情報を届けるものであり、紙に印刷されて受信者に届けられる際、かつては筒状になっている場合もあり、「本」で数えられても不思議ではない。しかし、より一般的には平面的な状態で受信者の目に触れることの方が多く、「枚」ま

---

25) 日本語においてもビデオテープは細長さに関連付けて理解されている、あるいは少なくともこうした仮説が受け入れられている。これもまた、プロトタイプ属性のイメージが最も強いからにほかならない。

たは「ページ」で数えられ、「本」は用いられない。電子メールの場合も、インターネット上でやり取りされ、空間的な実体に乏しく、「本」では数えられない。「本」は〈情報の移動を実現する道具〉を数えるものであるが、FAXや電子メールのように〈細長い〉という性質が実態に符合しないため「本」を用いないのであろう。

第3点として、中国語の量詞は日本語の助数詞に比べ、より創造的にスキーマ変換を起こしうることを挙げたい。

「本」は、いわゆる類別詞的な働きをする助数詞の中では、「個」や「つ」に次いで広く用いられているものの一つである。「本」を用いて数える対象は、2章で見たように多岐にわたるが、その多くは「細長い」または「一定のまとまった内容を持つ」のいずれかの属性につながるものである。メタファーやメトニミー、あるいはシネクドキなどの比喩以外に、イメージスキーマ変換による用法の拡張もあるが、およそそれぞれのスキーマの下にあって、いわゆる家族的類似性を認めうる。ただ、2.2で述べたラグビーのトライについては、「細長い」という属性を抽出しにくく、やや逸脱している。しかし、日常的な場面で相手に遣り込められた際「一本取られた」と言うことを考えると、この剣道の決まり手から来た表現が、「ポイントを稼ぐ」といった場面での使用を許容していると見ることもできる。

一方中国語“条”の場合は、日本語に比べプロトタイプ属性とのずれが大ききように思われる。犬を数える用法は、「細長い」が「大きい」へとシフトしてのことであるし、布団やハンカチを数える用法は、「布類」へシフトしてのことである。また考えや気持ちを数える用法は、“心路”や“心腸”から“路”や“腸”が脱落して成立したものであるが<sup>26)</sup>、結果として「細長いもの」との関係が希薄となっている。

こうした“条”に見られるスキーマ変換は、筆者が調査した“把”や“張”においても観察されるものであり、中国語の量詞一般が日本語の助数詞に比較してより創造的に使用されることを予測させる。儲澤祥2014: 71は“美女

---

26) 儲澤祥2014: 72-73参照。

发了一条状态：(後略)”の例を挙げ、この表現は“发一条状态微博”の意味であるが、言語現象としては“条”が“状态”の量詞になっていると指摘する。こうした表現が成立した際にはその使用理由が明白であるものの、時を経るにつれ曖昧になり、あるいは忘れられ、その結果、民間語源的な解釈が生まれることになる。非母語話者が理解しにくい量詞と名詞の結びつきがあるということは、量詞の発展の途上で創造的に量詞が用いられたことを示すものといえよう<sup>27)</sup>。

## おわりに

以上、“条”と「本」について、歴史的文献をもとに成立および一部の拡張的用法を検証し、今日的視点からなされる解釈との相違を明らかにした。また、“条”と「本」の多義的ネットワークを比較対照し、次の3点を指摘した。

- ① “条”にも「本」にも、情報に関わる事物を数える用法はあるが、拡張のルートは異なり、また導管メタファーによるものではない。
- ② 拡張的用法は、プロトタイプ属性との意味的関連が希薄な場合には淘汰されるか、あるいは新たに関連付けられることで持続する。
- ③ “条”は、「本」に比べ、より創造的に用法を拡張している。

本稿は、プロトタイプの用法が、どのようなメカニズムによって拡張的用法を産出したかという視点に立ち考察を進めた。こうした考察は、人間のごく一般的な認知活動に即したものであるため、例えば非母語話者が当該語彙の用法を理解するのに大いに役立つと思われる。また、辞書の記述においても複数の意味をどのような順番で配列し、下位分類を如何に設定するかを考える上で有益な情報を提供することになろう。その点においても、本稿が採用した方法は試みるに価値のあるものだと主張したい。

---

27) こうした省略表現は、日本語では起こりにくく、起こったとしても定着は困難だと思われる。その理由については、稿を改めて議論したい。

参考文献

- 陈颖 (2003) 《苏轼作品量词研究》巴蜀书社
- 储泽祥 (2014) 《“一条心”：省略、量名组配分工引发的固化和词汇化》，《汉语学报》第2期，71-77
- 濱野寛子・李在鎬 (2007) 「助数詞「本」のカテゴリー化をめぐる一考察—コーパスベースアプローチから—」『言語学と日本語教育』5，73-90
- 橋本永貢子 (2014) 『中国語量詞の機能と意味—文法化の観点から—』白帝社
- 洪藝芳 (2000) 《敦煌吐魯番文書中之量詞研究》文津出版社有限公司
- 黄盛璋 (1961) 《两汉时代的量词》，《中国语文》8月号，21-28
- 飯田朝子 (1999) 『日本語主要助数詞の意味と用法』東京大学人文社会研究科博士論文
- 飯田朝子 (2004) 『数え方の辞典』小学館
- 木村英樹 (1998) 『中国語はじめの一步』筑摩書房
- 小出慶一 (2003) 「助数詞「本」の用法の拡張について—なぜ「仕事」は「本」で数えられるか—」『群馬県立女子大学紀要』24号，1-13
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他訳『認知意味論』1993，紀伊国屋書店に拠った)
- 刘世儒 (1965) 《魏晋南北朝量词研究》中华书局
- Matsumoto, Yo (1986) The Japanese classifier -hon: A prototype-semantic analysis, *Sophia Linguistica* 20/21, 73-81
- 松本曜 (1991) 「日本語類別詞の意味構造と体系—原型意味論による分析—」『言語研究』99，82-106
- 孟繁杰 (2009) 《量词“条”的产生及其历史演变》，《宁夏大学学报（人文社会科学版）》第31卷第1期，35-40
- 孟繁杰 (2012) 《現代漢語形狀量詞的來源及其演變研究》政大出版社
- 三保忠夫 (1989a) 「古文書における助数詞（一）」『島根大学教育学部紀要』第23巻第1号，33-52
- 三保忠夫 (1989b) 「古文書における助数詞（二）」『島根大学教育学部紀要』第23巻第2号，19-27
- 三保忠夫 (1991) 「吐魯番出土文書」における量詞について『島大國文』第20巻，1-16
- 三保忠夫 (1992) 「トルファン墓葬出土文書における量詞の考察」『島根大学教育学部紀要』第23巻第2号，87-102
- 三保忠夫 (2006) 『数え方の日本史』吉川弘文館
- 西光義弘 (2004) 「類別詞と認知様式の相関に関する理論的考察」『類別詞の対照』，23-38
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』東京大学出版社
- 石毓智 (2001) 《表物体形状的量词的认知基础》，《语言教学与研究》第1期，34-41
- 杉村博文 (1998) 「イヌとワンピースと好漢」『中国語』2月号，25-30
- 田中佑 (2012) 「日本語助数詞の範囲—名詞と助数詞の連続性—」『筑波応用言語学研究』19号，117-126
- Tai James H-Y & Wang Lianqing (1990) A semantic study of the classifier Tiao (条), *Journal of*

*Cinense Language Teachers Association* 25, 1, 35-56

- 王鼎 (2009) 「助数詞「本」の近代までの用法拡張—認知意味論的解釈の再検討—」『日本近代語研究』5, ひつじ書房, 57-79
- 王绍新 (1989) 《量词“个”在唐代前后的发展》, 《语言教学与研究》第2期, 98-119
- 王绍新 (1992) 《唐代诗文中名量词的运用》, 《隋唐五代汉语研究》山东教育出版社
- 武丹 (2005) 《汉语数量结构语序演变的历史考察》, 中国社会科学院研究生语言系硕士论文
- 吴福祥・冯胜利・黄正德 (2006) 《汉语‘数+量+名’的格式的来源》, 《中国语文》第5期, 387-400
- 楊達 (1995) 「量詞の形態的な意味特徴について—視知覚機能による認知と関連して—」『中国語学』242号, 46-55
- 安井二美子 (1998) 「日中助数詞の認知意味論的研究」『語学教育研究論叢』第15号, 141-159
- 叶桂柳 (2008) 《明代汉语量词研究》岳麓书社
- 张延俊 (2002) 《也论汉语“数・量・名”形式的产生》, 《古汉语研究》第2期, 26-29
- 周芍、邵敬敏 (2014) 《近义词“条根道”的三维解释与组合机制》, 《语言教学与研究》第1期, 81-88
- 宗守云 (2011) 《认知范畴的原则共相与细节殊相—以汉语量词“条”和日语量词“本”的异同为例》, 《修辞学习》第2期, 50-56

※本文中の例文について、先行研究に掲載されていたものや北京大学中国語言学研究中心のコーパス (ccl: [http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl\\_corpus/](http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/)) から検索したもののうち、出典を確認できたものについては文献名のみ記してある。

橋本永貢子 Hashimoto Ekuko 岐阜大学教授 専門：中国語統語論・意味論